

井上哲次郎研究の現状と課題

はじめに

井上哲次郎は、近代日本における代表的な国家主義イデオログとして知られる。しかし長らくその研究は立ち遅れた状況にあった。井上の名前をメインタイトルに配した研究書は、二〇二三年になってようやくその最初のもので出版された(杉山亮『井上哲次郎と国体の光芒』官字の覇権と〈反官〉アカデミズム、白水社)。伝記書としても、明治中期に刊行された桜井吉松『井上博士』(敬業社、一八九三年)があるのみで、生涯全体を扱ったものはない。国家主義イデオログとしての知名度からすれば、驚くべきことであろう。他方で、井上在世中から井上に対する批判的ないし嘲笑的な言及は多く、島田英明の表現を借りれば「イノテツ」という略称の含む軽微な軽侮とともに、彼はきちんと読まれることなく嗤われてきたといえる⁽¹⁾。

真 辺 将 之

なお、この島田の文章は二〇一九年度日本思想史学会大会で組まれた第五回「思想史の対話」研究会「井上哲次郎とその時代」の趣旨説明の一節であるが、そのようなシンポジウムが組まれたことからわかるように、井上に関心を持つ研究者は近年増えている。後述するように、哲学史・儒教思想史・教育史・宗教史・文学史・言語学などの諸分野において、実証的に井上の果たした役割を再検討する機運が盛り上がっているのである。

本稿は、そうした井上研究の現状や達成点を確認するべく、これまでの井上研究の歩みを振り返るとともに、今後議論されるべき論点や明らかにされるべき課題を明確にすることを目的としている。ただし紙幅の都合で全ての文献を網羅的には紹介できず、研究史上重要と思われるものに絞り、また海外の研究については省略せざるをえなかった。

一 井上哲次郎研究の出発点

井上思想の学問的研究が行われ始めるのは、井上の生誕百年を迎えた一九五四年頃からである。香原一勢「井上哲次郎」（『日本歴史』七八、一九五四年一月）や伊藤吉之助「井上哲学の一面——現象即實在論——」（『中央大学文学部紀要』二、一九五五年三月）などがその嚆矢だが、いずれも紹介的、概説的であり、分析的ないし批評的なものではない。

明確に歴史的な位置付けを論じているのは、京都学派の高坂正顕による『明治文化史 思想言論編』（洋々社、一九五五年）⁽²⁾である。

高坂は、井上の議論は「哲学というには未だ遠く」「論証というよりは描写」「論理的な分析や証明ではなくして、美辞麗句をつらねた比喩」「西洋哲学の理解そのものが極めてお粗末」で、安易な折衷主義にすぎないと酷評する。この評価を受け継ぎ発展させたのが、同じく京都学派に属する大島康正「井上哲次郎『知識と思索の分離』」（朝日ジャーナル編『日本の思想家』第二、朝日新聞社、一九六三年）であった。大島は、高坂同様に井上の議論を「安易な折衷主義」とし、そのドイツ留学も「不毛の留学六年」「いろんな知識を、知識としてあれこれ生かじりしてきただけ」「折衷主義は、留学を終えてからますますひどくな」ったとする。また井上の哲学は「儒教を基本的な立場とした産物」であり、井上がキリスト教を反国体

的だとして攻撃したことも「宗教と道徳と政治の区別が全然わかってない」と厳しく批判する。また船山謙次「井上哲次郎の教育思想——国民道徳論を中心に——」（『北海道学芸大学紀要』第一部一増補、一九五七年八月）は、井上を絶対主義官僚制国家における思想の戦士として、「危険思想の防波堤たろうとするもの」「その本質において封建的思想のもち主」「思想の根基をなした家族国家観は、まさに封建的家族道徳を眼目とする」と位置付けている。また井上のキリスト教批判については、武田清子「日本におけるキリスト教原理の問題の一齣——教育と宗教の衝突論争をめぐって——」（『教育研究』一、一九五五年七月）⁽³⁾が、「教育と宗教の衝突論争」における井上のキリスト教批判について概観している。とはいえ、論争の時期のキリスト教批判とその後の国民道徳論とを、時系列を無視して一緒に論じており、井上思想の変遷などは視野に入っていない。以上のうち特に大島康正の論稿が掲載された『日本の思想家』は多くの読者を得、それ以前からの井上の同時代人や後進による悪口雑言とあいまって、未熟な哲学思想を武器にキリスト教を排撃して国民道徳を高唱したイデオログとしての井上イメージは強固なものとなった。

ただし、同じように国家主義イデオロギーと評価するものであっても、源了圓「教育勅語の国家主義的解釈」（坂田吉雄編『明治前半期のナショナリズム』所収、未来社、一九五八年）は、井上の勅語解釈は国家倫理と国家を越える普遍的倫理とを混同し同一視する

という問題を抱える一方で、その解釈には功利主義的な説明や国民の権利の承認なども見られ、また内藤耻叟らの伝統思想家から批判されたように、「儒教的神政国家における国民道德の規範たることを目指したのではなく、西洋の政治的・経済的・思想的諸圧力に充分に耐えうる」「近代的国家の国民道德の規範」を目指したものであると位置付ける。つまり源は、井上を封建的道德論者とした船山謙次と異なり、「近代文明の所産を取り入れ」て新しい東西文明の折衷様式を築こうとした、近代的な国家主義イデオログであったと位置付けたのである。

他方、井上の哲学思想については、船山信一「日本型観念論の確立者」井上哲次郎（同『日本の観念論者』所収、英宝社、一九五六年）⁽⁴⁾および船山信一『明治哲学史研究』（ミネルヴァ書房、一九五九年）⁽⁵⁾が長らく参照される古典的研究である。前者は、井上を「日本の観念論の確立者」とし、その哲学思想と宗教論、国民道德論との関わりを丁寧に概観している。「西洋の哲学的科学的要素が、つねに東洋の仏教的儒教的要素および国権主義的要素と結合し」「かかる形の東西文化の融合は後々まで日本の観念論を支配し、西田哲学の論理にまで糸を引いている」とし、また「井上は国民道德を強調しつつも、やはり普遍的な道德を否定することはできなかった」のであるが、その相違を「国民道德と倫理学説との相違」と位置づける井上の見方はあまりに単純であり、「その意味で彼の国民道德論はけっつきよくは一つの矛盾」であったと論じる。また後者では、井

上哲次郎の現象即実在論や、キリスト教批判、そしてそれに対するキリスト教徒からの反論、さらに井上の進化論理解などを取り上げ、井上の哲学は「結局折衷主義にほかならない」とするが、前述した多くの研究が東西思想の折衷を指摘しているのに対し、船山がいう折衷とは観念論と実在論の折衷という意味であり、その内容は異なっている。またキリスト教徒との論争について船山は、井上の議論を粗雑・浅薄と嘲笑し、キリスト教徒の側が少なくとも論理的には井上を圧倒したと評する意見が多いが、「孝悌忠信と共同愛国、つまり国家主義そのものを批判できない限り」キリスト教徒は結局論理的に勝つことはできないのであり、あくまで国体や国家主義を基本にする限りは、両者が衝突すると論じる「井上のほうがむしろ正しい」と断じ、その後キリスト信者が減り、指導者にも実業界や政界へ転じ教会から遠ざかった者が多く、また「キリスト教徒は単に消極的にキリスト教は国体、国家主義、勅語、その徳目に矛盾しないと弁明するだけであって、積極的に国体、国家主義、勅語、その徳目を批判することができず」のちには三教会同に参加し、帝国主義イデオロギーに忠実に従うに至った者が少なくないのであり、「実践的外面的」にも、「理論的内面的」にも、「キリスト教徒が敗けた」と論じている。

一九五〇年代の井上研究が、その哲学思想やキリスト教批判などに焦点を当てていたのに対し、一九六〇年に入ると、それ以外の部分での井上の位置付けを論じる研究も若干ながら現れる。なかでも

儒学史、特に陽明学史上における井上の位置付けについては、山下龍二「明代思想研究はどう進められてきたか」(『名古屋大学文学部研究論集 哲学』一二、一九六四年三月)がその後のスタンダードとなった。山下は、陽明学の实行主義が道德実践において有益と考えた井上がそれを利用しようする一方で、陽明学の「反權威・反官学」的傾向については捨象したと指摘する。その意味で井上の陽明学は、国家主義的倫理観としての陽明学であつたとし、祖先崇拜としての「孝」が国家主義的な「忠」と結びつけられ、忠孝倫理の絶対性を裏付けるものとして儒教倫理を利用したのだとするのである。

また井上の漢詩「孝女白菊詩」の成立過程については剣持武彦「井上巽軒「孝女白菊詩」の成立考―その比較文学的考察―」(『二松学舎大学論集』昭和四三年度、一九六九年三月)があり、ロングフェローやスコットの作品の影響を受けつつ、「純日本的な情感の世界のなかで統一され、中国の俗語体の長篇詩及び伝奇の表現をふまえて」作られたこの詩の文学史的な意義は従来考えられてきたよりも大きいと論じている。

二 井上研究の新展開

一九七〇年代に入ると、それまでの井上の位置付けを微修正しようとする研究があらわれはじめ、八〇年代までそうした傾向が続く。洪川久子「井上哲次郎のクリスト教批判をめぐって」(『日本大学精

神文化研究所教育制度研究所紀要』五、一八七一年四月)は、井上が国家主義の立場からキリスト教を批判したとしつつも、キリスト教を全否定したわけではなく、その長所として高く評価した部分もあったことを指摘した。また、井上の哲学思想に関しては、峰島旭雄「明治期における西洋哲学の受容と展開」(8)―井上哲次郎、その哲学の再吟味―(『早稲田商学』二二九、一九七二年七月)が、井上の現象即実在論は、従来言われているような単なる折衷ではなく、該博な哲学知識を駆使して現象即実在論・円融実在論を主張したことは、何等の独創性もないものとは言えない、と結論している(とはいえ疑義を呈したに止まり明確な位置付けはない)。また小坂国継「井上哲次郎の現象即実在論」(『研究紀要』(日本大学経済学部)四、一九八六年一〇月)⁶は、井上の現象即実在論の論理的な粗雑さを指摘し「たしかに井上の思想は、全体としては折衷主義的であつて、独創性に欠ける」としつつも、西洋哲学に関して「当時としてはかなり正確で広汎な認識があり」井上の現象即実在論が「近代の日本型観念論のいわば原型になっていることを考えれば、それを単に「学的な哲学」というには未だ遠」いものとして無視し去ることではない」とする。

この時期の研究で、以後の井上研究に大きな影響を与えたのが、渡辺治「天皇制国家秩序の歴史的研究序説―大逆罪・不敬罪を素材として―」(『社会科学研究』三〇―五、一九七九年三月)である。大逆罪・不敬罪から天皇制国家秩序のあり方を論じたこの論文の末

尾で渡辺は、著書『我が国体と国民道德』の内容が不敬であると井上が攻撃された事件の検討を行い、第一次大戦後の天皇制国家秩序の危機のなか、天皇制の正統性を万世一系の神話だけに求めるのでは不十分と井上は考え支配イデオロギーの再編を試みたが、その論理は、「国民の進化発展」に適合的である「道德的」「人道的」な性格にこそ天皇制支配の正統性があるとするものであったとする。そしてそうした論理ゆえに、天皇による支配が道德的ではない場合には、国体は変革されるべきだという論理が生じる危険性があると伝統的国体論者に受け取られ、攻撃されることにつながったのだと渡辺は論じる。大正期の井上の思想を初めて本格的に扱い、かつその変化の位相を時代状況のなかに位置づけた点で、画期的なものであった。

その後、大正期の井上の国体論と国民道德論については、森川輝紀「大正期国民道德論に関する一考察―井上哲次郎の国体論を中心に―」（『日本歴史』四六三、一九八六年一月）が、やはり体制のイデオログであった井上がなぜ不敬だとされて糾弾されるに至ったのかを、その思想の変化からあつづけた。森川は特に神話や三種の神器などの歴史的事実よりも精神的要素の継承こそが重要だと井上が考えたことが、神話や三種の神器の歴史的事実を否定する発言に繋がり糾弾されるにいたったのだと論じ、渡辺の議論を補強している。その上で、不敬事件後の井上は以前の国体論に戻ったと論じている。

また籠谷次郎「井上哲次郎の『教育勅語』解釈の変遷」（今井林太郎先生喜寿記念論文集刊行会『今井林太郎先生喜寿記念国史学論集』所収、同会発行、一九八八年一月）⁽⁷⁾は、井上の勅語解釈の変化を跡付け、徳目の個別的並列的な当初の理解から、家族国家観が顕著になって社会有機体論と家族制度が取り上げられ、さらに「皇運扶翼」に他の項目が収斂されるようになっていき、その後「日本主義」「日本固有の道」「神ながらの道」など日本独自の道徳が強調されるようになっていく変化の過程を整理する。明治から昭和までの長いスパンにわたって井上の勅語解釈の評価を論じたこの論文も重要な研究成果である。

また沖田行司「『六合雑誌』における井上哲次郎」（『キリスト教社会問題研究』三〇、一九八二年二月）は、井上のキリスト教批判が国体論と科学的合理主義の両面からするものであったことを指摘している点で、従来の井上理解に修正を迫っている。しかしその後、後年になると、ナショナリズムが前面に出てその宗教論は普遍的性格を失い、個別的な性格へと収斂されていく指摘するが、前述した渡辺治や森川の指摘とは不整合であり、やや安易にまとめた印象を受ける。また、沖田行司「井上哲次郎の国民道德と世界道德―教育勅語体制補完の論理―」（本山幸彦教授退官記念論文集編集委員会編『日本教育史論叢』所収、思文閣出版、一九八八年）⁽⁸⁾は、国際化の趨勢のなかで、西洋文明の持つ普遍性を伝統のうちに取り込みつつ、いかにして伝統そのものを再構築しようとしたか、という問題意識

から井上の道徳論を検討し、井上は、国際化を国家に内在する矛盾を止揚するためではなく、国家目的を補完するために用いているがゆえに、国際化を強調するほどに内的矛盾を増大させかえって特殊への執着を強めるという「国際化の陥穽」にとらわれた、とする。とはいえ、現象即实在論は、普遍的实在が個別的現象として現れるという論理であることをふまえるならば、沖田の言うような個別のために普遍を用いるという論理は成立しえないように思える。

以上のように、七〇年代から八〇年代にかけて、従来の井上理解を否定しないまでも、そこに留保ないし微修正を加えるとともに、井上思想を一つのものとして時期的変化を無視して論じるのではなく、時代状況の中での変化が論じられるようになった。とはいえ、従来の国家主義の権化で安易な折衷主義者とする井上観も根強く続いた。渡辺和靖「明治中期の思想的課題―井上哲次郎と大西祝―（一）」、『日本文化研究所研究報告』（東北大学）一〇、一九七四年三月⁹は、伝統的価値観を基底に抱いていた啓蒙思想家に対し、井上はそれに続く「第二世代」として、伝統的価値観を対自化した点で、新しい時代を担う存在であると位置付けつつ、その現象即实在論における实在の概念は、東西思想家の羅列でしかなく、「ここに、井上の七十年にもなんなんとする思想活動が、少しの動的発展をも見せなかったという停滞性が由来する」とする。また渡辺はこの五年後、「井上哲次郎における進化論・キリスト教」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』（一、一九七九年三月）を発表、井上の進化論

受容の根底に儒教的伝統があったと指摘し、また井上はキリスト教の長所すなわち倫理性を評価していたが、その長所と短所とがひとつに結びついていることを理解できず、西洋思想と伝統思想の結合の試みも、本来的に折衷主義を超えられなかったとする。進化論の影響を指摘し、キリスト教論を同時代の文脈の中で位置付けた点は新しいが、全体的な位置付けは旧来の表面的な折衷主義者という井上評価を超えるものとはなっていない。

このほか久木幸男・鈴木英一・今野喜清編『日本教育論争史録』第一巻近代編（上）（第一法規出版、一九八〇年）は「教育と宗教」第一次論争」「教育と宗教」第二次論争」の章を設けてその概要を解説している。特に第二次論争を取り扱い、そこでは井上ですら教育勅語では倫理教育は不十分であると主張するほどに、天皇制教育理念の機能不全という状況認識が広く共有されていたと論じていることは注目される。また、この時期のものとして特筆すべきは、平井法・佐尾裕子「井上哲次郎」（昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』五四、一九八三年）である。井上の生涯と業績・思想をコンパクトに概説しているほか、著作目録や関係資料目録を整えており、井上研究にとって、非常に有用である。なお井上の著作目録は現在でもこれが最も詳細なものとなっているが、近年豊富化したデータベース類を活用しながら、新しい著作目録が整備されることが求められるだろう。

以上のほかには、個別実証的な成果として、小堀桂一郎「K・フ

ローレンツの李白・巽軒詩抄」(『比較文学研究』二七、一九七五年六月)が、フロレンツが「ドイツ・東亜自然・民俗学協会」の会報に掲載した李白と井上の訳詩(李白一二編、井上一四編)のうちいくつかを紹介している。久保忠夫「孝女白菊詩」と「孝女白菊の歌」(『東北学院大学東北文化研究所紀要』一〇～一九、一九七九年三月～一九八七年八月)は、井上哲次郎の詩と落合直文の訳書を比較すると同時に、双方の初版本の校訂を行っている。

三 史料の発掘と研究の多様化

一九九〇年代以降、今日に至るまでは、井上研究の多様化の時代と位置づけることができる。井上に関する新史料の発掘や史料翻刻が進み、研究の数も次第に多くなってくるのである。史料に関しては、福井純子「井上哲次郎日記 一八八四―九〇『懷中雜記』第一冊」(『東京大学史紀要』一一、一九九三年三月)を皮切りに、以降の『東京大学史紀要』に井上の日記翻刻が掲載され、東京大学史料室編『巽軒日記・自明治三三年至明治三九年』(『東京大学史史料室、二〇一二年』)も刊行された。また、それまでの研究が、井上の哲学と、天皇制・国家主義イデオロギー思想(およびそれと結びついたキリスト教批判)を中心に展開されていたのに対し、儒教研究をはじめとするそれ以外の諸分野についての研究が簇生してくるようになる。以下、分野別にその状況を整理したい。

(一) 印度哲学・仏教

九〇年代以降の研究の最大の特徴は、それまで少なかった東洋哲学研究の立場からの井上研究が隆盛したことである。大きくわけて印度哲学や仏教に関するものと、儒教に関するものがあるが、前者の口火を切ったのは、今西順吉「わが国最初の『印度哲学史』講義―井上哲次郎の未公刊草稿―」(一)～(三)(『北海道大学文学部紀要』三九―一、一九九〇年一月、三九―二、一九九一年二月、四二―一、一九九三年一月)である。今西は、一八九四年の井上による印度哲学史の講義を翻刻するとともに、(二)で井上の思想形成との中で持つ井上思想の意義を考察し、西洋哲学の立場からその未熟さを指摘するのではなく、東洋哲学史の立場から再評価が図られるべきだとしている。しかし(四)は結局掲載されておらず、その再評価の試みは中絶してしまっている。なおその後今西は「井上哲次郎の開拓者的意義」(『印度仏教学研究』四九―二、二〇〇一年三月)を発表、井上哲学の仏教・インド哲学との結びつきを強調している。

また渡部清「井上哲次郎における「現象即實在論」の仏教哲学的構造について」(『哲学科紀要』(上智大学)二三、一九九七年三月)、同「井上哲次郎の哲学体系と仏教の哲理―「日本的哲学」の成立問題として―」(『哲学科紀要』二五、一九九九年三月)および「日本主義的形而上学としての「現象即實在論」―井上哲次郎の立論を中心に―」(『哲学論集』二八、一九九九年一〇月)は、井上の「現象

即實在論」の成立過程を丁寧な概観するとともに、その根底が、仏教思想、とりわけ大乘起信論にあったことを指摘し、それゆえに、井上においては理論哲学と実践哲学とが同工異曲のものとなったと論じる。

磯前順一「井上哲次郎の「比較宗教及東洋哲学」講義―明治二〇年代の宗教と哲学―」（『思想』九四二、二〇〇二年一〇月）⁽¹⁰⁾は、東京帝国大学での井上の「比較宗教及東洋哲学」講義を、諸資料をもとに丁寧に再構成しつつ、井上の比較宗教学の構想について比較的長いスパンで検討した貴重な成果である。その講義は、井上自身が後年回想しているような「公平なる立場」に立つものではなく、西洋の宗教に対する東洋哲学たる仏教の優位性を主張するための政治色の強いものであったと論じ、この東洋哲学史の講義が「対西洋を意識した日本のナショナリティの確立」という要素を持ち、西洋哲学を普遍的なものとして受容したうえで、その内部への日本の哲学・宗教の再定位という形をとっているがゆえに、西洋という他者にして普遍の眼差しのもと、その承認を得ることによって日本の思想的アイデンティティを築きあげる形にならざるをえなかったとし、井上の哲学が折衷的だと批判されるのも、井上の目的が東洋思想を西洋的に読み替えることにあった以上、当然であったとする。さらには磯前は、その後の井上思想の展開についても見通しを述べ、井上は明治三〇年代に入ると東洋思想の特質を儒教的なものに求め、倫理的宗教や理想的宗教という宗教統一を強く主張しはじめるとし、

その後明治四〇年代に入り、戊申詔書の煥発を契機とする官民一体となった国民道徳論を社会に唱導していくなかで、井上はその基軸にすべき思想として儒教をはっきり見据えるようになり、さらに日本の特異性を前面に打ち出すようになっていくとする。そして井上の認識論の基礎をなす現象即實在論は、特殊を普遍へとつなぐ回路であるとともに、逆に普遍性を特殊性に還元するという危険性をはらむものでもあり、実際大正期以降の井上の日本民族精神論はそうなっていたと論じる。また磯前順一・高橋原「井上哲次郎の「比較宗教及東洋哲学」講義―解説と翻刻―（１）」（『東京大学史紀要』二一、二〇〇三年三月）は、前述した磯前論文の基礎となった姉崎正治筆記の講義ノートを翻刻するとともに、解説を加えたもので、特に姉崎の『印度宗教史』との対比を試みている点は貴重である。なお（２）以降は掲載されていない。

清水乞「解説―井上哲次郎「印度哲学史」草稿と井上円了の『外道哲学』」（東洋大学井上円了記念学術センター編『井上円了選集』二二、東洋大学、二〇〇三年三月）は、両書を比較したうえで、哲次郎のものは客観的である一方事例研究となっており、他方円了のものは主観的・体系的で仏教者の立場からのものであると指摘している。鍾以江「釈迦は如何なる種族なのか―井上哲次郎と明治期東洋哲学の形成―」（『アリーナ』一九、二〇一六年）は、井上哲次郎の『釈迦種族論』を取り上げ、井上の同書の著述は、井上が留学した当時の西洋において、仏教がアリアン族つまり西洋の歴史叙

述の一部になっていたことから、井上が仏教を西洋の歴史の枠組みから東洋という言説のスペースに移動させようという課題を遂行すべく、釈迦がチュラニアン人種であったと論じたのだとする。しかし、もし鍾の論じる通りだとするなら、この論説はむしろ西洋に向けて発表されなければ意味がないはずである。井上が、常々西洋人の多くに対して東洋哲学の知識が不足していると見下していたことや、井上が留学前から東洋哲学や仏教についての一定の知識を有していたことを考えれば、仏教が東洋のものであることは井上にとって自明の前提であつたろう。井上にとって、印度と日本両者の哲学を、単に思想的ではなく民族的にも繋ぐことで「東洋哲学」としての結びつきの強さを日本人にむけて強調する意味がありこそすれ、仏教を西洋史から東洋史の枠組みに移すためであつたと位置づけることには疑問を感じる。

(二) 儒教

印度哲学や仏教と並んで、儒教研究の立場からの研究が増えたことも九〇年代以降の特徴で、いわゆる儒教三部作に関する研究、特に陽明学に関する研究が多く行われてきている。大島晃「井上哲次郎の『東洋哲学史』研究」(『ソフィア』西洋文化ならびに東西文化交流の研究)四五―三、一九九六年一〇月)は三部作を検討、陽明学は人物陶冶に功績があり、また神道と合一して儒教の日本化に貢献したことを評価し、またそこにおけるキリスト教批判は、のちの

「教育と宗教の衝突」論争におけるキリスト教批判と同一の論理が見られることなどを指摘する。また古学については活動主義を評価しているのに対し、朱子学については、積極的評価が少ない一方、単調な記述ゆえに、三部作のなかでもっともすっきりとして資料的価値を最も有することになったとも評する。井ノ口哲也「井上哲次郎の江戸儒学三部作について」(『東京学芸大学紀要人文社会科学系』二六〇、二〇〇九年一月)^①は、井上の三部作の成立過程を検討し、さらにそこに見られる学派分類を乗り越えるべき必要性を説く。瓜谷直樹「井上哲次郎の儒学研究の再検討―陽明学を中心に―」(『教育文化』二〇、二〇一一年三月)は、井上は第一次教育と宗教の衝突論争の頃には、過去においてキリスト教が果たした役割を一定程度認めるようになっており、西洋におけるキリスト教の役割を評価する一方で、日本ではそれに対抗しうるものは儒学であると考え、特に「実行」を重んじる陽明学を手始めに研究しはじめたのだとする。

杉山亮「明治期における儒教言説に関する一考察―井上哲次郎『儒学三部作』について(1)―」(『東京都立大学法学会雑誌』五八―一、二〇一七年七月)、同「私徳、公德、愛国―井上哲次郎『儒学三部作』について(2)―」(同五八―二、二〇一八年一月)、同「国教」の創造―井上哲次郎『儒学三部作』について(3)―」(同五九―一、二〇一八年七月)は、まず陽明学について、井上が「平民主義」的な性格を帯びた「民」の学問として位置づけつつ、内村

鑑三流の忠孝対立的な中江藤樹理解を敵視し、忠孝一致の家族制度をそこに読み取ることに対抗しようとしたとする。さらに大塩について井上は、大塩が客観的考察を軽んじたために真理を見誤り挙兵するに至ったとして、陽明学の「毒消し」を図り、陽明学の道德実践の有効性を評価しつつ、その実践がルールに基づいたものになるようにしようとしたと論じる。古学については、朱子学が持つ仏教的な宗教性や思弁性、「寂靜主義」を打破した点を評価、観念的な哲理ではなく、日常世界のなかで実践すべき行為を説き、日常性を重視することで、道德論が政治的な体制批判へと転化することを抑えようとしたのだと主張する。さらに、朱子学については、井上は朱子学の歴史を世俗道德の形成史として描いているとする。井上は自らの倫理的宗教論が仏教徒から批判されたために、出世間的な要素を持つ仏教徒を論敵とし、朱子学の教理が世俗化によって崩壊していく過程を描写することで、出世間的な仏教が今後の倫理の基準たりえないと暗に論じたのであるとする。古学研究や朱子学研究の仏教批判としての要素を指摘したことは新しい。

水野博太「明治期陽明学の勃興―井上哲次郎『日本陽明学派の哲学』に至る過程―」（『思想史研究』二四、二〇一七年一二月）は、従来『日本陽明学派之哲学』を中心に検討されてきた井上の陽明学認識を、時期を遡り留学以前から検討し、その変化を明らかにしている。留学時までは井上は日本儒学の流れのなかに「陽明学派」を見出していないこと、帰朝直後の一八九一年段階になると、陽明

学派に関する認識が出てくるが、しかしこの時点では、あくまで「哲学」としての独創性の評価からであり、行動主義的な評価をしているわけでもなく、陽明学と明治維新の結びつきについても論じられていないということを明らかにした。

また杉山亮「『産業人』井上哲次郎―講学院中道挫折居士と『儒学三部作』―」（『日本思想史学』五二、二〇二〇年九月）は、三部作の続編として構想されていた「折衷学派」の哲学は、書けなかったのではなく、書かなかったのである、とするもの。つまり、井上が構想し蟹江義丸が編纂実務を担当した『倫理彙編』において、三浦梅園の哲学が唯物論と結びつけられていることを根拠に、それを危険視した井上が保身と学術的良心を両立させたのだとする。しかし、蟹江の記述を論拠に井上の動機は説明できないであろうし、あるいは、井上はそれと違い批判的に三浦梅園を叙述することも可能であったはずである（実際、陽明学においてそのような「毒消し」を井上が行ったことを、杉山自身論じていたのではなかったか）。説得力に乏しいように思える。

以上のように、三部作に関する研究が、三部作そのもののテクスト分析を超えて、その前後の時期にまで及んで三部作を位置づける方向性へと拡大しつつあるのが現在の研究状況であるといえよう。そうになると、三部作以外の井上の儒教研究が重要になってくるが、三部作以外に関しては、山村奨『近代日本と変容する陽明学』（法政大学出版局、二〇一九年）が『日本陽明学派の哲学』だけでなく

それ以外の文献も駆使して井上の陽明学理解を本格的に検討している。その結果、井上の陽明学理解が、陽明学そのものからのみ生じたのではなく、キリスト教への対抗と民心統一のための儒教の活用という点では水戸学の、さらに陽明学のなかに秩序を破壊する可能性をも見出し批判する点においては太閤事件理解と強く結びついていることを明らかにしている。また水野博太「井上哲次郎における『日本哲学』の存在証明とその失敗」(『日本思想史』五二、二〇二〇年九月)は、一八九七年のパリでの国際東洋学者会議における井上の発表論文を検討、日本に哲学がないとされる西洋人の認識を打破すべく、井上は儒教の特に宇宙論と理気論を取り上げて日本哲学を紹介しようとしたのだと論じる。しかし、その企図は成功せず、むしろ日本哲学というよりも中国哲学の一派としての陽明学の復興という点において影響を与えることになったのだと論じている。井上の議論の国際的影響を明らかにした点で貴重な業績である。

このほかには、大島晃「井上哲次郎の『性善悪論』の立場―『東洋哲学』研究の端緒―」(『ソフィア・西洋文化ならびに東西文化交流の研究』四二―四、一九九四年一月)が、井上哲次郎の「性善悪論」をめぐる内田周平との論争を取り上げている。井上の目的が東洋哲学を統一して大系化することであり、それゆえ内田周平による二程解釈の細かな誤りを指摘されても意に介さなかったとする。町泉寿郎「幕末明治期における学術・教学の形成と漢学」(『日本漢文学研究』一一、二〇一六年三月)は、島田重礼と井上哲次郎の講義

を比較し、中国古典学の立場から説く島田と、哲学史の立場から説く井上との違いを指摘、「全体として見て、西洋哲学と比較しながら日中儒教哲学を説く井上の視点は新しいが、その反面で島田に比して、より教学色も感じられる。」とする。水野博太「高嶺三吉遺稿」中の井上哲次郎「東洋哲学史」講義」(『東京大学図書館紀要』三六、二〇一八年三月)は、金沢大学図書館「高嶺三吉遺稿」に含まれる井上の「東洋哲学史講義」を、解説を付して翻刻した。三浦節夫「井上哲次郎口述 東洋哲学史」の翻刻―井上円了の東京大学文学部二年生の聴講ノート―」(『井上円了センター年報』二七、二〇一九年三月)は、佐藤将之「井上円了思想における中国哲学の位置」(『井上円了センター年報』二一、二〇一二年九月)においてその存在を指摘された井上哲次郎「東洋哲学史」講義ノートの翻刻であり、井ノ口哲也「井上円了が受講した井上哲次郎の『東洋哲学史』講義」(『井上円了センター年報』二七、二〇一九年三月)はその解説である。

(三) 宗教論と道德論

以上のような東洋哲学に関わる研究が多く出された一方で、従来から井上研究の焦点であった宗教論や国民道德論に関する研究も数多く出されている。宗教論では、「シリーズ日本の宗教学」のひとつとして井上の宗教学・倫理学関連の著作の影印を中心とする『井上哲次郎集』全九巻(クレス出版、二〇〇三年)が出版されたこと

は大きい。第九卷に収録された島蘭進・高橋原・磯前順一「解説」は、井上の生涯と思想を簡単に概説し、学問的・思想史的な意義ある業績は大正初期までであるが、宗教学・宗教制度への影響という点ではその後の業績も検討に値するとし、特に大正期以降井上は神道との関わりを深め、昭和期の日本精神論へとつながっていくとする。

繁田真爾「一九〇〇年前後日本における国民道徳論のイデオロギー構造―井上哲次郎と二つの「教育と宗教」論争にみる―」上・下(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五三―三、二〇〇八年二月、五四―三、二〇〇九年二月)¹²⁾は、一九〇〇年前後に行われた第二次教育と宗教の衝突論争での議論をもとに、井上の国民道徳論の変容を問うものである。当該期における多くの井上批判の議論を紹介しつつ、井上が、そうした批判を受け、理想的な倫理的宗教への過渡的形態として、現在の既成宗教をも位置づけるという形で自説に重要な修正を行うに至ったとしている点は注目される。とはいえ、第一次論争はそもそもキリスト教批判に目的が限定されていたのであるから、宗教全般のあり方を議論している第二次論争への変化を問うとすれば、第一次論争の前後についても、キリスト教以外も含む全体的な井上の宗教論を検討する必要があるだろう(かつ、繁田は第一次論争においてキリスト教排撃であった井上が、第二次論争においてキリスト教を包摂する形で倫理的宗教論を唱えるに至ったとするが、キリスト教の部分的評価は第一次論争当時からすでになさ

れている)。

宗教論や国民道徳論に関する議論では、本稿で取り上げなかった文献も含め、安易に井上の「変化」を論じる研究が散見されるが、こうしたなか見城悌治「井上哲次郎による『国民道徳概論』改訂作業とその意味」(『千葉大学人文研究』三七、二〇〇八年三月)は、井上の議論の変化を丁寧に分析した注目すべき研究である。かつて世界主義を批判していた井上が、日露戦後に世界主義的な立場へと近づいたこと、さらに一九一一年には、教育勅語の解釈も時代に応じたものに変えていく必要があると述べ、第一次大戦後には教育勅語だけでは、朝鮮や台湾を教育することはできないので、国是を修正して新しい民族に与えることを主張してもいると指摘する。一九一二年の『国民道徳概論』にもそれが表れており、例えば日本の「日本の総合家族制度」に西洋の独立や権利観念を取り入れるべきことを説き、また国民道徳は同時に世界共通の普遍的道徳たる人道と不可分の関係にあると説いてもいるとする。ついで一九一八年版では、「宗教としては神道は幼稚」と述べるなど、多くを期待しない記述が増えていると指摘している。その後一九二八年の「新修」版に至ると、序文に社会改造を主張する諸主義への危機感と、それゆえに増補した部分があるとの言が述べられるとともに、第九章の「家族主義と社会主義」が「社会改造の諸主義と国民道徳」へと表題が変えられ、大幅にページ数も増えるが、他の章には加筆変更は認められず、また発禁となった『我が国体と国民道徳』でも「国民道徳は

国際道徳や国際教育と矛盾干渉するものではない」「国民道徳を進展完成することは、やがて国際道徳や国際教育を裨補する所以であり、又永久平和に進み行く段階ともなる」との記述があると指摘されている。沖田行司や磯前順一をはじめ、従来の研究の多くが、日露戦後、あるいはその後のある時点で、井上の議論が復古的、ないし日本特殊論的なものへと変質したとしているのに対し、大正期以降も井上が時代状況のなかである部分では普遍的・進歩的・世界的な思想への歩み寄りが続けていることを明らかにした点において、非常に大きな意義を持つ論文だといえよう。

このほか、前川理子「井上哲次郎における宗教と国民道徳」（同『近代日本の宗教論と国家』、東京大学出版会、二〇一五年）もまた、『倫理新説』から『国民道徳概論』にいたる井上の宗教論の変遷をたどったうえで、井上が一貫して普遍と特殊との関係を意識しており、国家主義も普遍的なものとして論じていた（両者の衝突の局面では一部辻褄の合わない場所もあるにせよ）と指摘、教育と宗教の衝突論争においても、キリスト教の非国家主義は日本だけでなく西洋にとっても不都合だと井上が考えていたと指摘している。『国民道徳概論』によって井上は強く道徳の特殊性、あるいは特殊道徳の理想化を打ち出すようになるが、それでもなお、普遍性の追求は無くなったわけではなく、それは日本人の同化力、つまり西洋文明を取り込みうる力の強調として現れているとする。さらに、同じ「忠孝一致」の国民道徳を説いた穂積八束や吉田熊次の議論と比較した

うえで、井上は普遍性の追求や合理主義的発想が際立っているとしている。見城や前川の指摘を踏まえるならば、それまでの研究のうちに、安易に普遍から特殊への変化を見出すのではなく、普遍と特殊との論理的な組み合わせのあり方が状況に応じてどのように変化したのか、ということ明らかにしていくことが求められるだろう。

以上の他には、井上が結成した東亜協会に関する研究として、荒川大輝「井上哲次郎による雑誌『東亜の光』創刊」（『日本史学集録』三八、二〇一七年七月）が、『東亜の光』の創刊経緯と、それが「国民道徳論」へと発展していく経過を追う。当初「青年の煩悶」への対応として「意志の修養」論を展開した井上は、その延長線上に「哲學的世界観」すなわち現象即實在論に基づき、宇宙と一体たる遠大な理想をいだき、現象界における欠点を脱出し完全を目指すべきであると主張するようになる。他方で、その理想を実現するにおいては、「吾々自身の特殊の境遇」に照らして進むことが必要で、そこから東洋の社会状態に応じた国民道徳に従う必要があるという形で国民道徳論が導き出されてくるとしている。

また冒頭で触れた杉山亮『井上哲次郎と「国体」の光芒』もまた、東亜協会とその機関誌『東亜の光』を軸に、井上哲次郎の国体論を分析している。すでに長尾宗典による丁寧な書評があり、紙幅の都合で詳しい内容とその批評はそれにゆずるが、第一章では加藤弘之との論争を扱い、それを通じて「井上の認識論的立場や思考が官学アカデミズムの主流となった」と論じている。しかし、「主流」と

なったことの論証は足りない印象を受ける。第二章では、福来友吉および千里眼事件との関係を軸に、井上が宇宙の大霊にいかにして接近するかという問題意識を抱きつつ、しかしその挫折により井上は戦略を転換し、神道や神勅の読み込みによって議論を展開するようになるとする。その延長線上に第三章では、井上が宗教性の利用という問題とどう向き合ったかを扱い、「普遍的大我」が神と同一視され、修養の目的とされたことや、井上が神勅に「日本的なるもの」の原型を見出し、それに基づいて国体論を再解釈し、宗教的情操を用いて道徳性を引き出そうとしたことを明らかにしている。

井上の宗教論について神道との関係性を論じたものは多くなく、井上の神道理解の分析を一步先に進めたことは間違いない。第四章では第一次世界大戦が国体論に与えた影響を検討する。大戦後のデモクラシー状況の変容とそのなかで国体を擁護するために、井上が日本を人道主義国家と位置づけ、王道国家論を唱えることで、民本主義的な要素を取り込んだことを明らかにしつつ、デモクラシーへの対抗のためにさまざまな国体論が唱えられるなかで、井上の国体論が以前のような優位性を持たなくなっていくことになる論じる。第五章では井上の著書が不敬とされた事件を扱う。特に牧野謙次郎や松平康国など井上を攻撃した側の思想や行動を深く追うが、井上に関する位置づけは従来の研究を大きく超えてはいない。本書は井上一人を主要な研究対象とした初めての単著であり、その意義は大きい。従来の研究で多く論じられてきた井上の哲学思想や、仏教

の影響などは大きく扱われていない。それと関連して、国体論や国家主義と、井上の思想的原理ともいべき現象即実在論との関係についても深く突きつめた分析が行われていない。本書が国体論研究であるがゆえに、国体構築や国家主義は井上の目指す理念として最初から当然の前提にされており、分析もそのための井上の論理構築に終止しているが、そもそも、なぜ国体論だったのか、なぜ国家主義が必要なのか、という部分が、まず明らかにされるべきなのではないか。

なお、神道に関しては、これ以前に、森下直貴「井上哲次郎の〈同情〉の形而上学―近代「日本哲学」のパラダイム―」（『浜松医科大学紀要 一般教育』二九、二〇一五年）が、『哲学会雑誌』を対象に、神道への接近と「日本精神」の探求について論じる。現象即実在論の立場が倫理にも反映され、自他の融合＝著者の言う〈同＝情（unipathy）〉を核心とする道徳観が「日本哲学」の中核に組み込まれたとする点は従来にない指摘である。また那希芳「井上哲次郎の宗教構想―キリスト教批判から「神ながらの道」へ―」（『思想史研究』二九、二〇二二年二月）は、明治から昭和期までの井上の宗教思想を概観しているが、数冊の書籍を扱うのみで先行研究の整理もない。とはいえ、昭和期の神道思想の影響を検討している部分は従来あまり分析されていない部分であり、昭和期の神道の影響を受けた時期においても、井上は「天御中至尊を「目的性」「ロゴス」「絶対理性」と言い換え、「道」を「一定不変の法則」というなど、現

象即實在論の延長線上に議論を展開しているとの指摘は重要である。しかしその意義付けについては、折衷の域を超えていないという沖田行司の評価を再確認するにとどまっている。昭和期の神道論や日本精神論においても、そこに現象即實在論的な普遍性の追求の姿勢が見られるという指摘は重要であり、単に「折衷」と意義付けるにとどまらず、そこにおける普遍と特殊の組み合わせのあり方の変化を精緻に検討することが必要であるように思われる。

なお、日本哲学ないし日本精神論との関わりでは、武士道論も重要な検討対象であろう。これらについても近年研究が登場しており、堀川峻・酒井利信・大石純子「井上哲次郎の武士道思想に関する一考察―近代武士道隆盛以前からの連続性に着目して―」（『武道学研究』五五―一、二〇二二年）が史実重視の立場から、史実よりも道徳論への活用を重視する方向へと井上の武士道論が変化することを論じ、永井博「井上哲次郎における武士道と捕虜」（『四日市大学論集』三四―二、二〇二二年三月）は、捕虜を恥とする観念の成立にあたって井上の果たした役割を論じる。また何燕生「道徳教育としての『禅と武士道』という言説の生成とその背景―新渡戸稲造・井上哲次郎から鈴木大拙まで―」（『東アジア仏教学術論集』一一、二〇二三年二月）は、武士道の歴史的伝統と文化的脈略を発見しようとした井上の武士道論は、歴史的な根拠をあまり持たないとされる新渡戸の武士道論の弱点を補ったとする。いずれの研究も井上個人の思想構造のなかに武士道論を位置付けているわけではなく、井上

研究の立場からの分析が今後の課題であろう。

（四）現象即實在論の評価

井上の生涯にわたる思想的原理として現象即實在論は重要であるが、その評価についても近年大きな変化が見られる。すなわち、板橋勇仁「日本における哲学の方法―井上哲次郎から西田幾太郎へ―」（『立正大学文学部論叢』一一九、二〇〇四年三月）は、井上独自の哲学的方法的思考を評価する。すなわち、当時の西洋の哲学思想が、實在を「意志」「無意識」「進化の活動」などと見なすのに対し、井上はそうした特定の性質・属性によって實在を特徴づけることを不適切とみなす点で独自性を持ち、また仏教思想や儒教思想など東洋的な思想についても、それを無批判に受容するものではなく、東西哲学を普遍的に統合するような、学としての新たな「哲学の論理」を構築しようとしていたと論じる。さらに、井上は、實在は内部直観によって得られるものであり、認識を超越したものでありつつ、しかし認識によって論理的に説明されることを介して「共時的に明晰」になる、すなわち、内部直観と認識とが相補いながら相互に他を根拠づけるのだとしており、この相互媒介という方法にこそ、井上の現象即實在論の方法論的特色があるとする。つまり認識の対象たりえない實在は科学の範囲外のものであり、そこにこそ、井上は科学から独立した哲学独自の存在意義を見出していたとする。西洋哲学の伝統であった実体と属性という枠組みを解体する、非実体

論的な井上の方法論は、決して「折衷的」という評価には収まりきらないものであると評価しているのである。

このほか、井上克人「明治期におけるショーペンハウアー哲学の受容について―井上哲次郎、R・ケーベル、三宅雪嶺に見る本体的一元論の系譜―」（『ショーペンハウアー研究』一二、二〇〇七年六月）は、ショーペンハウアー受容史の一環としての研究であるが、井上が一方で原坦山の『大乘起信論』の講義によって一元論に接し、他方でドイツ留学中にショーペンハウアーやハルトマンの思想と出会い、しかし彼らが大乘仏教に接していないことを不足に感じ、『起信論』で説かれた本体的一元論をふまえて、日本独自の哲学たる「現象即實在論」を提唱するに至ったと位置づける。ショーペンハウアーの「盲目的な意志」の發想を真實在の自発自展と読み替え、ショーペンハウアーにおいては乗り越えるべき対象とされ消極的な意味しか持たなかった「意志」を、自己内発的な起動イメージへと読み替えた点に、井上の独自性を見出している。以上の二つの研究は、東西道德の安易な折衷とする高坂・大島の評価や、東洋道德を西洋哲学で読み替えた以上それが折衷となるのは必然とする磯前の評価を覆すものであるということができよう。

このほか相楽勉「井上哲次郎「現象即實在論」の方法論的意義」（『東洋学研究』五〇、二〇一三年三月）は、“Reality”を「實在」と訳すことによどのような意味が込められていたか、ということを中心、「現象即實在論」の内容を解説し、その方法論的意義を説いた

もの。認識を超える存在でありながら「現象」のうちに直覚されるという實在について、論証にまでは至らなかったとしつつ、しかし、「現象」の空間時間的規定性を見出すことで、「實在」への道筋を示したという点に、「現象即實在論」の方法的な意義があるとしている。

以上のような原理論としての分析の他に、国家論や社会論との関わりのなかで現象即實在論を検討したのが、郭馳洋「明治期の哲学言説とネーション・社会―井上哲次郎の「現象即實在論」をめぐる―」（『年報地域文化研究』二一、二〇一八年三月）である。差別即平等を唱える井上の現象即實在論は、一方で無数の個人を大我に収斂させ国民的な不変性・共同性が必要との主張につながるとともに、他方で現実存在する社会的な格差の問題に関しては、現象としての差別を肯定する観点からその是正に無関心であったと郭は論じている。しかし、井上の現象即實在論は、そもそも現象において分裂しているように見えても、根底において一体であるのが實在だとするものである以上、それが道德論として共同性の主張に用いられるのは論理としておかしいように考える（井上の論理からすれば、四分五裂していても、根底においては事実として實在は元々一つのはずであり、そこから「一つたるべし」という規範は導き出せないはずである）。さらに、もし共同性を主張する場合、なぜ国家という単位での共同性であって、世界の共同性に行かないのか、という点も同様に問題化されるべきであろう。そのあたりの論理が検討されておらず、疑問を拭えない。郭はその後、「井上哲次郎における

現象即實在論における共同体の位相」(『日本思想史学』五二、二〇二〇年九月)で、現象即實在論との関係において、井上の倫理的宗教論を論じている。「大我」と「小我」の合一を追求する井上は必ずしも平等論者ではなく、資本主義を容認し、アトム化する個人をつなぎとめて共同性を維持しようとしたとするが、井上の内在的な論理構成との連関がしつかり説明されておらず不分明である印象を受ける。

いずれにせよ、井上の現象即實在論は、単なる折衷とする評価から、積極的な独自性を評価されるに至っており、またその社会的な役割についても検討が始まっている。晩年にいたるまで、現象即實在論が自身の思想原理であると井上自身も述べており、こうした評価の転換を検証しつつ、より精緻な分析が重ねられることが望まれるといえよう。

(五) ジェンダー

井上の議論の社会的な役割という点では、ジェンダー論の立場からの分析が現れたことも特筆すべきであろう。口火を切ったのは、関口すみ子『国民道德とジェンダー 福沢諭吉・井上哲次郎・和辻哲郎』(東京大学出版会、二〇〇七年)であるが、しかし基本的には教育勅語中心の天皇制国家のイデオログとしての役割を確認するにとどまっている。その後、姜華「大正デモクラシー期の修身教科書に見る良妻賢母教育―井上哲次郎編『女子修身教科書』を中心

として―」(『アジア文化研究』一九、二〇一二年六月)は、一九〇七年と一九二五年の女子修身教科書を比較し、いずれも良妻賢母主義・性別役割分業を中心に儒教的な道德を基本とするものでありつつ、しかし男女の人間の価値の同一性を主張し、婦人の職業活動を奨励し、婦人問題や婦人運動の重要性を強調するなど、同時期の他の修身教科書には見られない、時代状況に応じた新しい要素が見られること、また一九二五年版では、舅姑との関係を含む家族道德の記述が大幅に減少し、相互扶助の家族関係が説かれるなどの変化も見られることを指摘している。また、龔穎「『夫婦有別』から『愛情プラス分業』へ―井上哲次郎著修身(倫理)教科書と蔡元培の夫婦倫理観の近代化について―」(『倫理研究所紀要』二七、二〇一八年二月)は、蔡元培『中学修身教科書』(一九〇七年)と『訂正中学修身教科書』(一九二二年)が、井上哲次郎・高山林次郎『新編倫理教科書』および井上『中学修身教科書』に全面的に依拠しており、そこから、伝統的な「夫婦有別」ではない、夫婦の愛情に軸にしつつ役割分業を説く近代的な女性観が中国に波及することになったと論じる。関口の議論に比すれば、この両論文は井上の意外な一面を垣間見るものとなるであろうが、こうした議論を、井上の全体的な国民道德論の体系やその変化のなかにどう位置付けていくのが今後の課題となろう。

(六) 井上哲次郎不敬事件

井上哲次郎が不敬として攻撃された事件については、前述した渡辺治や森川輝紀の研究が思想内容から不敬事件の起こった必然性を主張していたのに対し、九〇年代以降、それとは異なる原因を見出す研究が出されている。高橋陽一「井上哲次郎不敬事件再考」(寺崎昌男編『近代日本における知の配分と国民統合』第一法規、一九九三年)⁽¹⁴⁾は井上哲次郎不敬事件の背景に、大東文化学院の改革をめぐる紛争があったことを明らかにした。浅沼薫奈「井上哲次郎と大東文化学院紛擾―漢学者養成機関における「皇学」論をめぐる―」(『東京大学史紀要』二七、二〇〇九年三月)は、高橋の研究を受け継ぎつつ、井上と井上を批判した「私学派」との教育観・学問観の違いを明らかにしている。また前述したように杉山亮も井上を批判した人々の思想と行動を明らかにしている。井上の書いたテキストを分析するだけではなく、井上の置かれていた政治的・社会的な状況についても踏まえて分析することが重要であることをこれらの研究は示しているだろう。

(七) 文学

文学史の立場からも、井上研究が重ねられてきている。赤塚行雄『『新体詩抄』前後 明治の詩歌』(学芸書林、一九九一年)は、『新体詩抄』について、明治詩歌史の立場から論じるとともに、日清戦争前後の軍歌時代のなかで、井上や外山正一が新しい新体詩の機運

を起こそうとしたことはもっと注目されるべきだとする。重要な指摘であろう。井上は『帝国文学』誌上で、「文学は国民の花なり、即ち国民精神の煥発して光彩を成すものなり」と論じつつ、「純粹なる美文学に向いて其用不用を論ずるは全く謬見に属す」「美文学は目的それ自身なり」とも論じており、⁽¹⁵⁾国家と文学との関係に関する井上の議論は、現象即実在論のような哲学的議論や、国民道徳論における普遍と特殊の問題などともつながりを持ちうる問題ではないかと思われる。このほか、山口廸彦「母権的ロマン主義の(法と文学)論的受容―バハオーフェンと井上哲次郎「孝女白菊詩」作用史―第一部」(『名経法学』一二、二〇〇二年三月)、大原敏行『明治長編詩歌 孝女白菊』(創英社、二〇一五年)、石川泰成「井上哲次郎「孝女白菊詩」の明治的表象」(『新しい漢字漢文化教育』七三、二〇二二年一月)など「孝女白菊」に関する研究もいくつか出ているが、近代文学史の立場からではなく、井上思想の研究の立場から、井上の詩文をどう位置づけるかは今後の課題であろう。

また文体論に関しては、鈴置拓也「明治十六年の井上哲次郎・中村正直議論に見る近代的学問と漢文」(『江戸風雅』二四、二〇二一年一月)が、単簡を尊ぶ漢文は近代的な学術の議論に適していないとして、それを廃止し近代的学問を議論するにふさわしい文体の創出を訴える井上と、自身にとって自然に発露するような平常の説話に近い文章を妥当とする中村正直の議論を比較している。なお鈴置は指摘していないが、中村があくまで筆者自身にとって自然に発

露されるかどうかを重視していたのに対し、井上は読み手に理解されるか、そこで対話が可能か、という双方向性を重視していることも指摘できる。こうした文体論もまた、近代的な学問のあり方に関する井上の議論とも深く関わるものであり、井上の思想体系のなかで再考察される必要があるだろう。

(八) 言語学・訳語

紙幅の都合で書誌情報を列記する暇がないが、井上が編纂した辞書等における訳語の研究も金敬雄や真田治子など多くの研究者によって行われている。⁽¹⁶⁾しかしいずれも、日本語学・翻訳語研究の立場からの個別事実の指摘が多くを占め、それら訳語の選定が井上の思想とどう絡まりあっているかについてはほとんど論じられていない。わずかに許智香「井上哲次郎らの『哲学字彙』(一八八一年)に関する歴史的考察―哲学関連翻訳語の問題―」(『東アジアの思想と文化』六、二〇一四年一月)⁽¹⁷⁾が、井上の漢字翻訳語の創出は、西洋に対抗しつつ西洋的知識によって中国と対峙する行為であったとするが、図式的な粗い見取りに感じられる。訳語の問題と井上思想の連関については今後の大きな課題である。

おわりに

以上のように、近年諸分野において、井上の果たした役割を再検

討する機運が盛り上がっている。とはいえ、それらの研究のほとんどは、例えば哲学研究者が哲学史の文脈で井上の「現象即実在論」に着目したり、儒教研究者が儒学史の文脈で井上のいわゆる「儒教三部作」を検討したり、あるいは宗教史の研究者が明治期の宗教論研究の一環として井上の宗教論を検討したりといった形で、各学問分野ごとの問題関心に沿う形で行われてきており、井上個人の思想のあり方を総体的に明らかにするというよりは、それぞれの個別テーマ史の一齣として、井上の活動の一部分を検討するのみとなり、井上の生涯全体を通貫する視点がないものが多い。そのことは、井上の思想形成期の検討がこれまで全くなされていないことにも示されている。そうしたなか井上一個人を対象とした杉山の著書が登場した意義は大きいですが、それもまた井上の全生涯を深く検討したものではなく、国体論研究の立場から東亜協会を対象を絞っており、未検討の課題はなお多い。

現状では、井上に触れた論文数の増加とは裏腹に、複数の統一しえない井上像が乱立しているのが現状である。自らの問題関心に合致する特定の一時期のみを検討してその変化を論じようとするために、それ以外の時期をしっかりと検討することなく安易に井上思想の「変化」を結論づけようとする傾向が目立つため、それぞれの研究者の見解の間に相矛盾する部分が多い。以上を踏まえるならば、今後はそうした個別分野史ではなく、井上哲次郎という個人の全生涯を対象に据えつつ、その全体像を把握することが必要であると考

える。

その際に鍵になるのは、国家主義イデオログとされる井上における「国家」の位置づけであろう。それは「普遍」と「特殊」の問題と言い換えてもよい。井上は哲学的議論においては、東西哲学の融合による真理の追求を旨としていた。井上の「現象即實在論」が日本一国を超越した議論であるのに対して、教育・宗教・道徳・文学に関する議論はいずれも、日本を足場に、日本という国家の将来のあり方に関する議論が中心となっている。とするならば、井上が国家というものものの役割をどう考えていたのか、なぜ井上が国家の存在にこだわったのか、それは井上の哲学的・普遍的なパースペクティブと、どう切り結ぶものであったのか、ということに軸に、諸分野における井上の主張と、その変遷とを統一的に把握する必要があるだろう。昭和期まで井上が普遍的真理の追求や現象即實在論の主張を捨てていないことを踏まえるならば、普遍から特殊へ、進歩から伝統へという「変化」を安易に結論付けるのではなく、普遍と特殊の組み合わせ方、ないしは両者の論理的な関係性の変化として、井上の思想が把握されるべきなのではないかと考える。

また従来の研究は、主に（狭義の）思想史の手法によって井上の書き記したテキストのみを対象に検討を進めるものが多く、政治・社会状況のなかで井上のテキストを解釈する傾向に乏しい。関連する公文書・私文書の検討もほとんど行われていない。分析も原理論的な部分にのみ集中し、例えば戦争や植民地支配にどう向き合った

かについての研究もほとんどなく、この二、三〇年で蓄積が重ねられてきた「帝国」や「植民地」をめぐる議論との対話がほとんどない¹⁸。一方で普遍的な道徳を根本的原理として重視し、かつ国家についてもその道義性を強調していた井上が、日本がかかわった戦争や植民地統治の現状とどう向き合ったかは、井上の議論の性質を考えらるうえでも必須の分析対象ではないか。

なお、本稿では海外の研究については触れることができなかったが、中国では、二〇二一年に井上哲次郎の著作中国語訳選集全四巻が編集出版された（南開大学教授劉岳兵主編、中国社会科学出版社）。中国人研究者による井上研究も近年増えており、本文で触れたものの他、日本語による論文としては、井上および門弟の章炳麟への影響を明らかにした彭春凌「章炳麟『讀仏典雜記』と井上哲次郎編『哲学叢書』」（『神戸市外国語大学外国学研究』九三、二〇一九年十二月）や、井上がドイツ留学中に出会った中国文人との交流を明らかにした龔穎「漢詩唱和を通しての近代日中文化交流——井上哲次郎、潘飛声、関桂林を中心に——」（『倫理研究所紀要』三一、二〇二二年八月）などの研究も出されている。こうした東アジア思想史との接点を探る研究は今後さらに増えてくると予想される。そして、井上が大学時代に社会進化論の影響を強く受け、またドイツに留学してドイツ哲学の影響を強く受けたこと、またインド初期仏教に関する研究も行っていることを考えるならば、西洋思想史やインド思想史との対話も可能であろう（本文中で紹介した水野博太の研究はその

端緒であろう)。海外の井上研究者も少なからず存在しており、井上という人物を通して、そうしたグローバルな研究の展開も可能となってくるであろう。

他にも提起したい細かな論点は多いが、紙幅が尽きた。今後何らかの形で、本稿で触れられなかった論点についても、具体的に明らかにできればと考えている。

注

- (1) 板東洋介ほか「井上哲次郎とその時代」(『日本思想史学』五二、二〇二〇年九月)。
- (2) のち高坂正顕著作集第七巻『明治思想史』(理想社、一九六九年)と改題して出版された。
- (3) のち武田清子『人間観の相剋—近代日本の思想とキリスト教』(弘文堂、一九五九年)に収録。
- (4) 『船山信一著作集』第八巻(こぶし書房、一九九八年)に収録。
- (5) その後増補版が一九六五年に出され、また『船山信一著作集』第六巻(こぶし書房、一九九九年)に収録された。
- (6) のち小坂国継『明治哲学の研究—岩波書店、二〇一三年』に収録。
- (7) のち籠谷次郎『近代日本における教育と国家の思想』(阿吽社、一九九四年)に収録。
- (8) のち沖田行司『日本近代教育の思想史研究』(日本図書センター、一九九六年)に「国民道徳と世界道徳—井上哲次郎—」として収録。
- (9) のち渡辺和靖『明治思想史—儒教的伝統と近代認識論』(ベリかん社、一九七八年)に「井上哲次郎と体系への志向」として収録。
- (10) のち磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜—宗教・国家・神道』(岩波書店、二〇〇三年)に収録。

- (11) のち井ノ口哲也『道徳教育と中国思想』(勁草書房、二〇一三年)に収録。
- (12) のち繁田真爾『「悪」と統治の日本近代—道徳・宗教・監獄教誨』(法蔵館、二〇一九年)に所収。
- (13) 長尾宗典〈「書評と紹介」〉杉山亮「井上哲次郎と「国体」の光世—官学の覇権と〈反官〉アカデミズム」(『日本史学集録』四四、二〇一三年七月)。長尾は主に杉山による「官学アカデミズム」の規定に疑義を呈しているが、筆者も同感である。
- (14) のち高橋陽一『共通教化と教育勅語』(東京大学出版会、二〇一九年)に「国民道徳論と井上哲次郎不敬事件」として収録。
- (15) 井上哲次郎『日本文学の過去及び将来』(『帝国文学』一一、一八九五年一月)。
- (16) 真田治子「学術用語集『哲学字彙』改訂と編者書き込み本の見出し語について」『文学・語学』二二七、二〇一六年二月)にその時点までの研究状況が概観されている。
- (17) のち許智香『Philosophy から「哲+学」へ』(図書出版文理閣、二〇一九年)に収録。
- (18) この点については、前述した許智香の研究や、井上厚史「井上哲次郎の儒教解釈と武士道(同『愛民の朝鮮儒教』所収、ベリかん社、二〇二二年)がそれを意識した議論を行っているが、分析が粗く、結論が先に立っている印象が拭えない。